

ングを行っている。また副作用チェックや麻薬の服薬指導なども行っている。「迅速」に関してはタキソールのプレメジの統一などによりミキシング時間の短縮を行った。「正確」に関しては泡立ちやすい薬剤、難溶性の薬剤、過量充填されている薬剤など

薬剤の特徴と捉えた正確なミキシングを心掛けている。

入院の抗がん剤のミキシングや服薬指導が十分にできていないなどがあり今後の課題である。

入院時持参薬管理実施状況

薬剤部 神谷令子

I. はじめに

入院時に患者が持参した薬の内容を正確に把握することは、入院後の治療を安全に進めるうえできわめて重要である。平成16年末に他施設で持参薬が関連した重大な医療事故が発生しており、このような事故を防ぐため、平成19年1月より薬剤師による入院時持参薬管理を開始した。

II. 方 法

予約入院で持参薬のある患者と面談し、薬剤を確認しながら、服薬状況や副作用歴・アレルギー歴等のインタビューを行う。患者から持参薬を預かり、薬剤とインタビューの内容及びハイリスク薬の指摘、医師・看護師に伝えるべき内容等を「入院時持参薬指示表」に記載し、預かった薬剤と共に病棟に上げる。薬剤管理指導料を1回のみ算定する。

III. 実施状況

実施率は予約入院患者のほぼ6割で、薬剤管理指

導件数増加にも寄与している。

IV. 結 果

持参薬管理を行うことにより種々の問題点が発見された。内容に関するものとしては術前の抗血小板薬投与、複数の医療機関での重複投与、相互作用、用法指示の不十分、調剤ミスなど、患者側の問題点としては、服用法の誤りや自己調節、保管法の不適、食物との相互作用などである。また、当院採用薬剤への切替の際にも問題が発生する可能性がある。

V. ま と め

有効な薬物治療の継続や、DPCに関連する経済的メリットなどの理由から、持参薬の使用が増えている。しかし、持参薬には前述のように様々な問題がある。これらの問題が継続されるのを防ぎ、安全な医療を提供するために、持参薬管理に薬剤師が係ることは重要な意味があると考える。

移植医療について ～院内移植コーディネーターの役割～

院内移植コーディネーター（臨床工学課） 田形勝至

当院は静岡県より臓器提供推進モデル病院に指定されている。このモデル病院には静岡県より任命された2名～3名の院内移植コーディネーターが活動を行っている。院内移植コーディネーターの役割は、

臓器提供者（ドナー候補者）が発生した時に、医療者側とドナーとその家族に対し中立的な立場で公平に関わり、移植が適正かつ円滑に行われるようコーディネートすることや、腎臓移植希望者（透析患